

# 大学生の被災地でのボランティア活動参加における 危機と必要とする心理的支援

堀 匡\*

## 問題と目的

1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災は、「ボランティア革命」や「ボランティア元年」等と呼ばれ（山下，2014），我が国において自然災害からの復興に，一般の人々がボランティアとして関わる大きな契機となった。2011年3月11日に発生した東日本大震災においても，日本各地から多くの人々がボランティアとして被災地での救援活動に参加しており，現在も復興に向けた一つの大きな力となっている。このような被災地でのボランティア活動には，大学生も多数参加しており，復興に向けた地域支援においては，大学生のような若者の力も不可欠なものとなっている。

これまでの研究から，大学生の災害ボランティアへの参加は，地域貢献のみならず，学生自身の学習意欲の向上や精神的成長を促すような教育的効果を示すことが報告されている（茶屋道・筒井，2012；和井田・田中・小林・小泉，2013；小林，2014など）。例えば，小林（2014）は，東日本大震災ボランティアに参加した大学生123名を対象とする自由記述式アンケート調査の結果から，日常とは違った文脈に身を置くことや身近な人以外との交流を通して，「社会のなかでの自分の役割」等を考えるきっかけとなる学生が多かったことが見て取れると報告している。

しかし，その一方で，災害現場での救援活動は，凄惨な場面や過酷な現実への直面を強いられる可能性がある。他にも，救援者の業務には，①二次被害の危険性，②遺体との関わりや遺族との関わりを持つ可能性，③混乱した状況のなか，迅速な対応を求められる，④社会的に大きな期待を寄せられ，強い使命感や責任感を求められる，⑤過重労働に陥りやすい，⑥弱音を語りづらい職場（組織）風土などの特徴も備わっている（重村，2014）。そのため，救援者は，災害現場での活動後，心身に不調をきたす危険性があることが指摘されている（Guo, Chen, Lu, Tan, Lee, & Wang, 2004；加藤・飛鳥井，2004；餅原，2011；Perrin, DiGrande, Wheeler, Thorpe, Farfel, & Brackbill, 2007）。重村（2014）によると，このような救援者特有

---

\*人文学部講師—臨床心理学，健康心理学

のストレスは「惨事ストレス」と呼ばれており、惨事ストレスを経験しうる代表的な職種として、消防士、警察官、海上保安官、自衛隊員、医療・福祉関係者、行政職員、遺体関連業務従事者などの専門職の他に、救援ボランティアが挙げられている。人的な災害ではあるが、Perrin et al. (2007) は、2001 年 9 月 11 日に発生した World Trade Center テロにおける救援者を対象に、災害から 2 ～ 3 年経過後に PTSD の兆候を示した者の割合を様々な職種別に算出したところ、団体に所属していないボランティア (21.2%) が最も高かったと報告している（警察官 (6.2%)、消防士 (12.2%)、医療関係者 (11.6%)、建築関係者 (17.8%)、清掃員 (10.6%)、ボランティア組織 (7.2%)、行政職員 (11.8%)）。また、この研究では、救援活動経験や訓練経験の少なさが、PTSD 傾向を高めるリスクとなることが示されている (Perrin et al., 2007)。

一般の大学生は、災害現場での救援活動や特別な訓練の経験は浅いと考えられ、単独の参加でも、大学生同士の集団の参加であっても、災害ボランティアにおいては、PTSD 発症のリスクを十分に備えていると言える。また、災害ボランティアに参加する大学生のすべてが災害現場の最前線で活動するとは限らないが、大学生は、若年齢で、精神的に揺れやすいアイデンティティ確立期に該当していることを考慮すると、被災地域での活動によって価値観や人生観までもが大きく揺さぶられかねない。さらに、堀・佐藤・齋藤・池田・吉武 (2015) は、大学生の場合、災害現場における直接的な体験の影響だけでなく、ボランティア活動と学業の両立の難しさから大学を休みがちになることや、ボランティア参加学生間で意見の対立が生じうること、被災地住民の方とのトラブルに巻きこまれうることなど、間接的にも様々な影響を被る危険性を指摘している。

これらのことから、災害ボランティアに参加する大学生に対しては、必要に応じて何らかの心理的支援を行っていくことが、惨事ストレスの予防において重要であると言える。特に、大学生の心理的問題への援助から大学適応促進のための予防教育まで幅広い援助機能を担っている学生相談機関は、災害ボランティア参加学生の支援においても、重要な役割を担うことが期待される。しかしながら、これまでのところ、災害ボランティアに参加する学生への心理的支援に関しては、東日本大震災後の被災地でのボランティア活動に関する実践報告(金子, 2011; 市来・大久保, 2013 など) が少数見られるのみで、体系的な支援方法や支援体制が確立されているとは言えない。今後大災害が起きた際、学生が安全にボランティアに参加し、ボランティア経験を自己の成長に有効に役立ててもらうためにも、災害ボランティア参加学生への体系的な心理的支援の在り方について検討していくことは重要な研究課題と言える。

災害ボランティア参加学生への体系的な心理的支援の在り方を検討していくための基礎研究として、堀他 (2015) は、全国の大学の学生相談機関を対象に質問紙調査を実施した。この研究は、学生が災害ボランティアに参加することについて、学生相談機関担当者が抱く危機や必要と考える心理的支援について調べている。調査の結果、心身の不調や過剰な高揚感・

使命感の高まりなど、被災地でのボランティア活動の体験から引き起こされる直接的な悪影響についての危惧が強かった。そして、多くの機関に共通して、心理相談やコンサルテーションなどの個別支援、事前教育やフォローアップなどの集団支援、注意喚起を促すポスター掲示などによる教育・啓発に関して支援の必要性が高く評価されていた。

そこで本研究では、大学生側の認識に焦点をあて、学生自身は、災害ボランティアにおいてどのようなことを危惧し、どのような心理的支援を求めているかについて調べることを目的とする。学生と学生相談機関双方の認識が明らかになることは、今後体系的な支援体制を検討していく際に有益な情報となりうる。

## 方法

**調査対象者** 東日本大震災の被害が大きかった東北地方の A 県にある B 大学に所属する大学生 161 名、および東日本大震災においてほとんど被害を受けなかった東海地方の C 県にある D 大学に所属する大学生 66 名を対象に質問紙調査を行った。

**調査時期** B 大学での調査は、2014 年 2 月中旬に実施し、D 大学での調査は 2015 年の 7 月下旬に実施した。

**調査手続き** 質問紙調査は、それぞれの大学において筆者が担当する教職関連科目（B 大学）および心理学の専門科目（D 大学）の講義終了後の時間を使って実施した。調査は無記名で実施し、その場で調査紙を配布して回答を求め、回収した。その結果、B 大学では、136 名（回収率 84.5%）、D 大学では 62 名（回収率 93.9%）の回答を得た。

**調査項目** 以下の①～③について尋ねた。

①**基本情報** 所属学部と学年、東日本大震災後の被災地でのボランティア活動経験の有無について尋ねた。また、ボランティア活動経験がある場合は、活動期間、主な活動場所、主な活動内容、ボランティア団体加入の有無についても尋ねた。

②**大規模災害発生後に被災地でのボランティア活動に参加する際の危惧** 震災などの大規模災害後に、学生自身が被災地でのボランティア活動に参加する場合、危惧することとして以下の (a) ～ (g) の 7 項目について、それぞれ危惧する程度を、「全く危惧しない (1 点)」、「あまり危惧しない (2 点)」、「どちらでもない (3 点)」、「やや危惧する (4 点)」、「非常に危惧する (5 点)」の 5 件法で尋ねた。具体的な項目は、(a) 悲惨な現場体験による心身の不調(ショック、無力感、疲労感など)、(b) 過剰な高揚感や使命感の高まりなどの情緒面への影響、(c) ボランティア活動が過大な負担となり、授業を欠席しがちになること、(d) 価値観・人生観の急激な変化、(e) ボランティア参加学生間やスタッフ間でのトラブル、(f) 被災地の住民の方とのトラブル、(g) ボランティアから戻ってからの日常生活（学業や研究活動）に対してやりがいを持てなくなることであった。これらの項目は、堀他（2015）で使用した学生相

談機関対象の質問紙項目を、学生が対象となるように表現を修正して用いた。

また、上記の（a）～（g）以外に危惧されることがある場合は、その内容についても自由記述により回答を求めた。各項目については、大規模災害発生後1年以内（以後、災害直後とする）と大規模災害発生後2年目以降（以後、災害後中期とする）それぞれの時期別に回答を求めた。

**③大規模災害発生後に被災地でのボランティア活動に参加する際に大学に求める心理的支援** 震災などの大規模災害後に、学生自身が被災地でのボランティア活動に参加する場合、大学に求める心理的支援として以下の（a）～（h）の8項目について、それぞれ必要性を感じる程度を「全く必要性を感じない（1点）」、「あまり必要性を感じない（2点）」、「どちらでもない（3点）」、「やや必要性を感じる（4点）」、「非常に必要性を感じる（5点）」の5件法で尋ねた。具体的な項目は、（a）被災地の情景にショックを受けた際に学内で相談（カウンセリング等）を受けられる、（b）ボランティア活動先でトラブルに巻きこまれた際に学内で相談が受けられる、（c）被災地ボランティアに参加する際に事前教育（オリエンテーション等）が受けられる、（d）被災地ボランティア参加後にフォローアップ（参加後のふりかえりの話し合い等）が受けられる、（e）被災地ボランティアに学生相談員（カウンセラー）が同行する、（f）被災地でのボランティアに参加した学生を対象に定期的なストレスチェックが実施され、結果のフィードバックが受けられる、（g）ボランティアの心構えや気をつけることなどのマニュアルの配布、（h）自身のボランティア体験について学内で自由に語れる場所を設ける、であった。これらの項目は、堀他（2015）で使用した学生相談機関対象の質問紙項目を、学生が対象となるように表現を修正して用いた。なお、堀他（2015）で用いた項目のうち、学生が対象とならないような3項目（「被災地ボランティア同行教員やスタッフへのコンサルテーション」、「ポスターの掲示やリーフレットの配布などによる注意喚起」、「学生相談担当者の学内のボランティア支援組織への参加」）は削除し、新たに「ボランティアの心構えや気をつけることなどのマニュアル配布」、「自身のボランティア体験について学内で自由に語れる場所を設ける」の2項目を追加した。

また、上記の（a）～（h）以外に大学に求める支援がある場合は、その内容についても自由記述により回答を求めた。各項目については、災害直後と災害後中期それぞれの時期別に回答を求めた。

**倫理的配慮** 質問紙の表紙に、①本調査の目的、②本調査への協力は任意であり、協力しない場合でも一切の不利益は生じないこと、③答えにくい項目については回答する必要のないこと、④本調査から得られた内容は研究資料としてのみ使用すること、⑤本調査から得られた内容は今後研究の一部として公表する可能性があること、⑥本調査は無記名で行うため、調査結果から個人を特定されることはないことの6点について明記した。また、調査実施前に、上記の内容を調査者が口頭でも説明し、同意が得られた場合にのみ調査への回答を依頼した。

## 結果

### (1) 回答者の属性

東日本大震災後に被災地でのボランティア活動経験のある学生は26名であり、すべて震災の被害が大きかったA県内にあるB大学に所属していた。そこで、B大学の回答者のうち、ボランティア経験のある学生を「ボランティア群（26名）」、ボランティア経験のない学生を「被災圏内群（110名）」（以下、圏内群とする）とした。また、被災地域から遠方のC県内のD大学の学生は「被災圏外群（62名）」（以下、圏外群とする）とした。それぞれの群の属性をTable1に示した。また、ボランティア群に関して、活動期間、主な活動場所、主な活動内容、ボランティア団体参加の有無をTable2にまとめた。

すべての群において、調査回答者は、ほぼ2年生に集中していた。また、ボランティア群は、教育学部生の占める割合が高く（38.5%）、圏内群は、理学部生が約半数を占め（58.2%）、圏外群はすべて文学・人文学部の学生であった（100%）。

ボランティア群の活動の詳細について、活動期間は、1日～数日という短期間での参加者が最も多かったが（26.9%）、1ヶ月を超える長期間の参加者も全体の約3割存在した（1ヶ月～半年11.5%、半年以上19.2%）。主な活動場所としては、「仮設住宅や避難所等」、「被災地域の学校や学習支援スペース等」、「災害現場」でのボランティア活動に参加する学生が多かった。主な活動内容に関しては、多岐にわたるが、「瓦礫や泥の撤去」や「遺留品探し」、「炊き出し・給水補給」などの災害現場での活動、「仮設住宅・避難所等」での活動、子どもたちへの「学習支援」に多くの学生が従事していた。なかでも、小中学生への学習支援に参

Table 1 各群の回答者の属性（度数と%）

|    |       | ボランティア群    | 圏内群         | 圏外群        |
|----|-------|------------|-------------|------------|
| 専攻 | 文学・人文 | 3 (11.5%)  | 16 (14.5%)  | 62 (100%)  |
|    | 教育    | 10 (38.5%) | 21 (19.1%)  | 0 (0.0%)   |
|    | 工学    | 2 (7.7%)   | 3 (2.7%)    | 0 (0.0%)   |
|    | 農学    | 1 (3.8%)   | 4 (3.6%)    | 0 (0.0%)   |
|    | 薬学    | 2 (7.7%)   | 2 (1.8%)    | 0 (0.0%)   |
|    | 理学    | 8 (30.8%)  | 64 (58.2%)  | 0 (0.0%)   |
| 学年 | 2年生   | 25 (96.2%) | 103 (93.6%) | 48 (77.4%) |
|    | 3年生   | 1 (3.8%)   | 5 (4.5%)    | 7 (11.3%)  |
|    | 4年生   | 0 (0.0%)   | 1 (0.9%)    | 7 (11.3%)  |
|    | 大学院生  | 0 (0.0%)   | 1 (0.9%)    | 0 (0.0%)   |
| 計  |       | 26 (100%)  | 110 (100%)  | 62 (100%)  |

Table 2 ボランティア群の活動期間、主な活動場所及び活動内容（度数と％）

|                    |                                                                |            |
|--------------------|----------------------------------------------------------------|------------|
| 活動期間 <sup>1)</sup> | 1日～数日                                                          | 7 (26.9%)  |
|                    | 1週間程度                                                          | 2 (7.7%)   |
|                    | 数週間                                                            | 4 (15.4%)  |
|                    | 1ヶ月～半年                                                         | 3 (11.5%)  |
|                    | 半年以上                                                           | 5 (19.2%)  |
|                    | 不明                                                             | 5 (19.2%)  |
| 活動場所 <sup>2)</sup> | 災害現場                                                           | 5          |
|                    | 仮設住宅や避難所等                                                      | 9          |
|                    | 被災地域の学校や学習支援スペース等                                              | 8          |
|                    | 被災地域の老人ホーム                                                     | 1          |
|                    | 被災者の方の住宅                                                       | 1          |
|                    | 不明                                                             | 3          |
| 活動内容 <sup>2)</sup> | 瓦礫や泥の撤去                                                        | 4          |
|                    | 遺留品探し                                                          | 1          |
|                    | 炊き出しや給水補助                                                      | 2          |
|                    | 地域住民の安否確認（自治会のサポート）                                            | 1          |
|                    | 仮設病院の受付                                                        | 1          |
|                    | 仮設住宅や避難所等での作業手伝い（草むしり、雪かき、催しの手伝いなど）                            | 2          |
|                    | 仮設住宅や避難所等の居住者の方との対話や触れ合い活動（足湯、高齢者の方と手芸をする、子どもと遊ぶ、居住者の方の話を聴くなど） | 3          |
|                    | 仮設住宅や避難所等への慰問活動（演奏会、ダンスの披露）                                    | 2          |
|                    | 小中学生への学習支援                                                     | 7          |
|                    | 高校生との対話（進路や地元の未来について）                                          | 1          |
|                    | 老人ホーム職員の手伝い                                                    | 1          |
|                    | 被災住宅の掃除や倒れた家具を起こす作業                                            | 1          |
|                    | 電話相談                                                           | 1          |
|                    | 被災地に関心を持ってもらうためのツアーの企画・実行                                      | 1          |
|                    | 不明                                                             | 1          |
| ボランティア団体           | 加入                                                             | 8 (30.8%)  |
|                    | 未加入                                                            | 17 (65.4%) |
|                    | 不明                                                             | 1 (3.8%)   |

<sup>1)</sup> 長期の参加者は、定期的もしくは不定期に活動先を訪問する形でボランティアを行っている。

<sup>2)</sup> 複数回答のため、％は算出しなかった。

加する学生が最も多かった。また、組織的なボランティア団体に加入して活動している学生は、約3割であり（30.8%）、半数以上の学生は、個人や友人同士、サークルなどの学生同士の集まりとしてボランティアを行っていた（65.4%）。

## (2) 大学生が大規模災害後の被災地でのボランティア活動において危惧すること

震災などの大規模災害後に、学生が被災地でのボランティア活動に参加する際に危惧する事柄について、時期別に、各群の (a) ～ (g) の項目の平均値と標準偏差を算出した (Table3, Table4)。なお、欠損値のあるデータは、項目ごとに集計や以後の分析から除外した。

災害直後 (Table3) において、ボランティア群では「(f) 被災地の住民の方とのトラブル」( $M = 4.19$ )、圏外群では「(a) 悲惨な現場体験による心身の不調 (ショック, 無力感, 疲労感など)」( $M = 4.31$ ) の平均値が4点 (「やや危惧する」) 以上という高い水準にあった。他にも、圏内群では、「(f) 被災地の住民の方とのトラブル」( $M = 3.83$ )、圏外群では、「(b) 過剰な高揚感や使命感の高まりなどの情緒面への影響」( $M = 3.92$ )、「(d) 価値観・人生観の急激な変化」( $M = 3.95$ ) の平均値が4点 (「やや危惧する」) に近い、比較的高い水準にあった。

次に、各群の得点を比較するため、一元配置分散分析を行った。その結果「(f) 被災地の

Table 3 災害直後における危惧する項目についての平均値と標準偏差 (SD) および分散分析の結果

| 項目                   | ボランティア群 |      |      | 圏内群 |      |      | 圏外群 |      |      | F 値       | 多重比較      |
|----------------------|---------|------|------|-----|------|------|-----|------|------|-----------|-----------|
|                      | n       | 平均値  | SD   | n   | 平均値  | SD   | n   | 平均値  | SD   |           |           |
| (a) 心身の不調            | 26      | 3.54 | 1.33 | 105 | 3.59 | 1.17 | 62  | 4.31 | 0.95 | 8.77 ***  | ボラ, 圏内<圏外 |
| (b) 過剰な高揚感や使命感の高まり   | 26      | 3.00 | 1.27 | 104 | 3.06 | 1.21 | 62  | 3.92 | 0.98 | 12.21 *** | ボラ, 圏内<圏外 |
| (c) 授業を欠席しがちになる      | 26      | 2.77 | 1.61 | 105 | 2.85 | 1.28 | 62  | 3.40 | 1.22 | 4.05 *    | ボラ, 圏内<圏外 |
| (d) 価値観・人生観の急激な変化    | 26      | 3.04 | 1.15 | 104 | 3.06 | 1.16 | 62  | 3.95 | 1.26 | 11.87 *** | ボラ, 圏内<圏外 |
| (e) 学生間やスタッフ間でのトラブル  | 26      | 3.00 | 1.33 | 105 | 3.03 | 1.25 | 62  | 3.50 | 1.23 | 3.06 *    | 圏内<圏外     |
| (f) 住民とのトラブル         | 26      | 4.19 | 1.10 | 104 | 3.83 | 1.08 | 62  | 3.65 | 1.24 | 2.12      |           |
| (g) 日常生活にやりがいを持てなくなる | 26      | 2.38 | 0.90 | 105 | 2.15 | 1.10 | 62  | 2.73 | 1.23 | 5.12 **   | 圏内<圏外     |

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

Table 4 災害後中期における危惧する項目についての平均値と標準偏差（SD）および分散分析の結果

| 項目                   | ボランティア群 |      |      | 圏内群 |      |      | 圏外群 |      |      | F 値     | 多重比較      |
|----------------------|---------|------|------|-----|------|------|-----|------|------|---------|-----------|
|                      | n       | 平均値  | SD   | n   | 平均値  | SD   | n   | 平均値  | SD   |         |           |
| (a) 心身の不調            | 26      | 2.77 | 1.03 | 105 | 2.80 | 1.16 | 62  | 3.18 | 1.05 | 2.52    |           |
| (b) 過剰な高揚感や使命感の高まり   | 26      | 2.31 | 0.93 | 104 | 2.62 | 1.16 | 62  | 2.94 | 1.01 | 3.44 *  | ボラ<圏外     |
| (c) 授業を欠席しがちになる      | 26      | 2.35 | 1.47 | 105 | 2.55 | 1.27 | 62  | 2.76 | 1.24 | 1.04    |           |
| (d) 価値観・人生観の急激な変化    | 26      | 2.58 | 1.17 | 104 | 2.69 | 1.03 | 62  | 3.37 | 1.22 | 8.43 ** | ボラ, 圏内<圏外 |
| (e) 学生間やスタッフ間でのトラブル  | 26      | 2.62 | 1.20 | 105 | 2.84 | 1.21 | 62  | 2.95 | 1.22 | 0.71    |           |
| (f) 住民とのトラブル         | 26      | 3.62 | 1.06 | 104 | 3.52 | 1.10 | 62  | 3.31 | 1.17 | 0.99    |           |
| (g) 日常生活にやりがいを持てなくなる | 26      | 2.04 | 0.87 | 105 | 2.03 | 1.01 | 62  | 2.44 | 1.13 | 3.23 *  | 圏内<圏外     |

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$ 

住民の方とのトラブル」以外の項目で、有意差が見られた（Table3）。多重比較（LSD 法、5% 水準）の結果、「(a) 悲惨な現場体験による心身の不調（ショック、無力感、疲労感など）」（ $MSe = 1.27$ ）、「(b) 過剰な高揚感や使命感の高まりなどの情緒面への影響」（ $MSe = 1.31$ ）、「(c) ボランティア活動が過大な負担となり、授業を欠席しがちになること」（ $MSe = 1.71$ ）、「(d) 価値観・人生観の急激な変化」（ $MSe = 1.43$ ）において、圏外群の得点が、ボランティア群、圏内群に比べて有意に高かった。また、「(e) ボランティア参加学生間やスタッフ間でのトラブル」（ $MSe = 1.57$ ）、「(g) ボランティアから戻ってからの日常生活（学業や研究活動）に対してやりがいを持てなくなること」（ $MSe = 1.25$ ）では、圏外群の得点が、圏内群に比べてのみ有意に高かった。

一方、災害後中期（Table4）においては、各群ともすべての項目の平均値が、災害直前に比べて低く、3 点台（「どちらでもない」）中ごろ～2 点（「あまり危惧しない」）台に留まった。そこで、災害直後と災害後中期の危惧の程度を比較するため、群ごとに  $t$  検定を行った。その結果、各群とも、すべての項目において、災害後中期の得点は、災害直後に比べて有意に

低かった（ボランティア群 (a)  $t(25) = 4.12, p < .001$ , (b)  $t(25) = 3.05, p < .01$ , (c)  $t(25) = 2.85, p < .01$ , (d)  $t(25) = 3.09, p < .01$ , (e)  $t(25) = 2.30, p < .05$ , (f)  $t(25) = 2.67, p < .05$ , (g)  $t(25) = 2.21, p < .05$ ; 圈内群 (a)  $t(104) = 9.78, p < .001$ , (b)  $t(103) = 5.49, p < .001$ , (c)  $t(104) = 4.37, p < .001$ , (d)  $t(103) = 5.45, p < .001$ , (e)  $t(104) = 3.22, p < .01$ , (f)  $t(103) = 4.50, p < .001$ , (g)  $t(104) = 2.57, p < .05$ ; 圏外群 (a)  $t(61) = 8.12, p < .001$ , (b)  $t(61) = 6.41, p < .001$ , (c)  $t(61) = 3.96, p < .001$ , (d)  $t(61) = 4.90, p < .001$ , (e)  $t(61) = 4.11, p < .001$ , (f)  $t(61) = 2.01, p < .05$ , (g)  $t(61) = 2.41, p < .05$ 。

次に、災害後中期の各群の得点を比較するため、一元配置分散分析を行った。その結果、「(b) 過剰な高揚感や使命感の高まりなどの情緒面への影響」, 「(d) 価値観・人生観の急激な変化」, 「(g) ボランティアから戻ってからの日常生活（学業や研究活動）に対してやりがいを持てなくなる」とにおいて有意差が見られた(Table4)。多重比較(LSD法, 5%水準)の結果, 「(d) 価値観・人生観の急激な変化」においては、圏外群の得点が、ボランティア群、圈内群に比べて有意に高く ( $MSe = 1.24$ ), 「(b) 過剰な高揚感や使命感の高まりなどの情緒面への影響」においては、圏外群の得点が、ボランティア群に比べてのみ有意に高く ( $MSe = 1.17$ ), 「(g) ボランティアから戻ってからの日常生活（学業や研究活動）に対してやりがいを持てなくなる」とにおいては、圏外群の得点が、圈内群に比べてのみ有意に高かった ( $MSe = 1.07$ )。

(a)～(g) 以外の項目で危惧することについては、自由記述から、各群に共通して、自分が本当に役に立てるか、かえって迷惑をかけるのではないかという「ボランティア活動に対する迷い」が挙げられた(記述例「ボランティアによる支援が必ずしも適切なものではなく、とても忙しい現場に余計な仕事を増やすこと」, 「自分がしている活動に意味があるのか?」, 「自分の行動が良い結果につながらない、最悪、悪い結果になってしまうこと」, 「余震が発生した場合、自分が足手まといになってしまうのではないか」)。他にも、圈内群や圏外群では、「二次被害に遭遇する危険性」(記述例「傷害の発生」, 「慣れない場所での事故やケガ」)が共通して挙げられた。また、圏外群では、「周囲の人からの理解が得られるかという不安」(記述例「被災地に行くことに対して、両親や親戚から、反対や嫌悪的な感情を向けられるのではないか」), 「放射能の影響への不安」(記述例「放射能の不安」)などが挙げられた。

### (3) 大学生が大規模災害後の被災地でのボランティア活動に参加する際に大学に求める心理的支援

震災などの大規模災害後、学生が被災地でのボランティア活動に参加する際に、大学に求める心理的支援について、時期別に、各群の(a)～(h)の項目の平均値と標準偏差を算出した(Table5, Table6)。

災害直後(Table5)においては、各群に共通して、「(a) 被災地の情景にショックを受けた際に学内で相談(カウンセリング等)を受けられる」(ボラ  $M = 4.31$ ; 圈内  $M = 4.00$ ;

Table 5 災害直後における支援に関する各項目の平均値と標準偏差（SD）および分散分析の結果

| 項目                           | ボランティア群 |      |      | 圏内群 |      |      | 圏外群 |      |      | F 値      | 多重比較      |
|------------------------------|---------|------|------|-----|------|------|-----|------|------|----------|-----------|
|                              | n       | 平均値  | SD   | n   | 平均値  | SD   | n   | 平均値  | SD   |          |           |
| (a) 心理相談                     | 26      | 4.31 | 0.62 | 104 | 4.00 | 0.94 | 62  | 4.52 | 0.67 | 7.92***  | 圏内<圏外     |
| (b) トラブル相談                   | 26      | 4.19 | 0.90 | 104 | 4.19 | 0.84 | 62  | 4.52 | 0.57 | 3.73*    | 圏内<圏外     |
| (c) 事前教育                     | 26      | 4.04 | 1.34 | 104 | 4.38 | 0.83 | 62  | 4.45 | 0.84 | 1.92     |           |
| (d) 参加後の<br>フォロー<br>アップ      | 26      | 3.81 | 1.13 | 104 | 3.28 | 1.03 | 62  | 3.73 | 1.00 | 4.98**   | 圏内<ボラ, 圏外 |
| (e) 学生相談員<br>(カウンセラー)<br>の同行 | 26      | 3.35 | 1.41 | 104 | 3.63 | 1.08 | 62  | 4.37 | 0.83 | 12.54*** | ボラ, 圏内<圏外 |
| (f) 定期的な<br>ストレス<br>チェック     | 26      | 3.50 | 1.33 | 104 | 3.38 | 1.08 | 62  | 4.39 | 0.73 | 19.72*** | ボラ, 圏内<圏外 |
| (g) マニュアル<br>配布              | 26      | 3.96 | 1.46 | 104 | 4.15 | 0.95 | 62  | 4.56 | 0.95 | 4.32*    | ボラ, 圏内<圏外 |
| (h) 自由に語れ<br>る場の設置           | 26      | 3.38 | 1.13 | 104 | 2.95 | 1.10 | 62  | 3.55 | 1.10 | 6.08**   | 圏内<圏外     |

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$ 

圏外  $M = 4.52$ ), 「(b) ボランティア活動先でトラブルに巻きこまれた際に学内で相談が受けられる」(ボラ  $M = 4.19$ ; 圏内  $M = 4.19$ ; 圏外  $M = 4.52$ ), 「(c) 被災地ボランティアに参加する際に事前教育（オリエンテーション等）が受けられる」(ボラ  $M = 4.04$ ; 圏内  $M = 4.38$ ; 圏外  $M = 4.45$ ) の平均値が4点（「やや危惧する」）以上という高い水準にあった。また、圏内群と圏外群では、「(g) ボランティアの心構えや気をつけることなどのマニュアルの配布」(圏内  $M = 4.15$ ; 圏外  $M = 4.56$ ) の平均値が4点（「やや危惧する」）以上という高い水準にあり、ボランティア群でも、4点に近い比較的高い値を示した（ $M = 3.96$ ）。他にも、圏外群では、「(e) 被災地ボランティアに学生相談員（カウンセラー）が同行する」（ $M = 4.37$ ）, 「(f) 被災地でのボランティアに参加した学生を対象に定期的なストレスチェックが実施され、結果のフィードバックが受けられる」（ $M = 4.39$ ）の2項目の平均値が、4点以上（「やや危惧する」）という高い水準にあった。一方、ボランティア群では、「(d) 被災地ボランティア参加後にフォローアップ（参加後のふりかえりの話し合い等）が受けられる」（ $M = 3.81$ ）の平均値が4点（「やや危惧する」）に近い、比較的高い水準にあった。

次に、各群の得点を比較するため、一元配置分散分析を行った。その結果、「(c) 被災地ボランティアに参加する際に事前教育（オリエンテーション等）が受けられる」以外の項目

で有意差が認められた (Table5)。多重比較 (*LSD* 法, 5%水準) の結果, 「(e) 被災地ボランティアに学生相談員 (カウンセラー) が同行する」 ( $MSe = 1.12$ ), 「(f) 被災地でのボランティアに参加した学生を対象に定期的なストレスチェックが実施され, 結果のフィードバックが受けられる」 ( $MSe = 1.05$ ), 「(g) ボランティアの心構えや気をつけることなどのマニュアルの配布」 ( $MSe = 1.07$ ) において, 圏外群の得点が, ボランティア群, 圏内群に比べて有意に高かった。また, 「(a) 被災地の情景にショックを受けた際に学内で相談 (カウンセリング等) が受けられる」 ( $MSe = 0.67$ ), 「(b) ボランティア活動先でトラブルに巻きこまれた際に学内で相談が受けられる」 ( $MSe = 0.59$ ), 「(h) 自身のボランティア体験について学内で自由に語れる場所を設ける」 ( $MSe = 1.22$ ) においては, 圏外群の得点が, 圏内群に比べてのみ有意に高かった。さらに, 「(d) 被災地ボランティア参加後にフォローアップ (参加後のふりかえりの話し合い等) が受けられる」 においては, ボランティア群と圏外群の得点が, 圏内群に比べて有意に高かった ( $MSe = 1.08$ )。

一方, 災害後中期 (Table6) においては, 各群とも 「(b) ボランティア活動先でトラブルに巻きこまれた際に学内で相談が受けられる」 (ボラ  $M = 3.96$ ; 圏内  $M = 4.03$ ; 圏外  $M = 4.11$ ), 「(c) 被災地ボランティアに参加する際に事前教育 (オリエンテーション等) が受

Table 6 災害後中期における支援に関する各項目の平均値と標準偏差 (SD) および分散分析の結果

| 項目                           | ボランティア群  |      |           | 圏内群      |      |           | 圏外群      |      |           | <i>F</i> 値 | 多重比較      |
|------------------------------|----------|------|-----------|----------|------|-----------|----------|------|-----------|------------|-----------|
|                              | <i>n</i> | 平均値  | <i>SD</i> | <i>n</i> | 平均値  | <i>SD</i> | <i>n</i> | 平均値  | <i>SD</i> |            |           |
| (a) 心理相談                     | 26       | 3.73 | 1.15      | 104      | 3.49 | 0.94      | 62       | 3.85 | 0.97      | 2.82       |           |
| (b) トラブル相談                   | 26       | 3.96 | 1.18      | 104      | 4.03 | 0.89      | 62       | 4.11 | 0.94      | 0.27       |           |
| (c) 事前教育                     | 26       | 3.88 | 1.48      | 104      | 4.10 | 0.94      | 62       | 3.97 | 1.06      | 0.55       |           |
| (d) 参加後の<br>フォロー<br>アップ      | 26       | 3.54 | 1.24      | 104      | 3.17 | 1.06      | 62       | 3.47 | 0.99      | 2.13       |           |
| (e) 学生相談員<br>(カウンセラー)<br>の同行 | 26       | 3.00 | 1.30      | 104      | 3.22 | 1.05      | 62       | 3.71 | 1.11      | 5.3 **     | ボラ, 圏内<圏外 |
| (f) 定期的な<br>ストレス<br>チェック     | 26       | 2.96 | 1.31      | 104      | 2.98 | 1.08      | 62       | 3.76 | 1.11      | 10.16 ***  | ボラ, 圏内<圏外 |
| (g) マニュアル<br>配布              | 26       | 3.58 | 1.53      | 104      | 4.05 | 0.90      | 62       | 4.06 | 1.21      | 2.08       |           |
| (h) 自由に語れ<br>る場の設置           | 26       | 3.35 | 1.23      | 104      | 2.81 | 1.08      | 62       | 3.16 | 1.18      | 3.31 *     | 圏内<ボラ     |

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

けられる」（ボラ  $M = 3.88$ ; 圈内  $M = 4.10$ ; 圏外  $M = 3.97$ ）の2項目の平均値が、災害直後と同様、4点（「やや危惧する」）以上もしくは、4点に近い比較的高い水準にあった。また、圈内群と圏外群では「(g) ボランティアの心構えや気をつけることなどのマニュアルの配布」（圈内  $M = 4.05$ ; 圏外  $M = 4.06$ ）の平均値が、災害直後に続いて、4点（「やや危惧する」）以上という高い水準を維持していた。

災害直後と災害後中期で、各支援に関する必要性の程度を比較するため、群ごとに  $t$  検定を行った。その結果、ボランティア群では、「(a) 被災地の情景にショックを受けた際に学内で相談（カウンセリング等）を受けられる」（ $t(25) = 3.26, p < .01$ ）, 「(e) 被災地ボランティアに学生相談員（カウンセラー）が同行する」（ $t(25) = 3.14, p < .01$ ）, 「(f) 被災地でのボランティアに参加した学生を対象に定期的なストレスチェックが実施され、結果のフィードバックが受けられる」（ $t(25) = 3.38, p < .01$ ）, 「(g) ボランティアの心構えや気をつけることなどのマニュアルの配布」（ $t(25) = 3.10, p < .01$ ）において有意差が見られ、いずれも災害後中期の得点が、災害直後に比べて有意に低かった。圈内群では、「(g) ボランティアの心構えや気をつけることなどのマニュアルの配布」を除いた項目すべてで有意差が見られ、いずれも災害後中期の得点が、災害直後に比べて有意に低かった（(a)  $t(103) = 7.61, p < .001$ , (b)  $t(103) = 3.76, p < .001$ , (c)  $t(103) = 4.51, p < .001$ , (d)  $t(103) = 2.59, p < .05$ , (e)  $t(103) = 6.36, p < .001$ , (f)  $t(103) = 6.91, p < .001$ , (h)  $t(103) = 2.34, p < .05$ ）。圏外群においては、すべての項目において有意差が見られ、いずれも災害後中期の得点が、災害直後に比べて有意に低かった（(a)  $t(61) = 6.14, p < .001$ , (b)  $t(61) = 3.98, p < .001$ , (c)  $t(61) = 4.32, p < .001$ , (d)  $t(61) = 2.14, p < .05$ , (e)  $t(61) = 5.88, p < .001$ , (f)  $t(61) = 4.98, p < .001$ , (g)  $t(61) = 4.06, p < .001$ , (h)  $t(61) = 2.92, p < .01$ ）。

次に、災害後中期の各群の得点を比較するため、一元配置分散分析を行った。その結果、「(e) 被災地ボランティアに学生相談員（カウンセラー）が同行する」, 「(f) 被災地でのボランティアに参加した学生を対象に定期的なストレスチェックが実施され、結果のフィードバックが受けられる」, 「(h) 自身のボランティア体験について学内で自由に語れる場所を設ける」の3項目で有意差が認められた（Table6）。多重比較（ $LSD$  法, 5%水準）の結果、「(e) 被災地ボランティアに学生相談員（カウンセラー）が同行する」（ $MSe = 1.22$ ）, 「(f) 被災地でのボランティアに参加した学生を対象に定期的なストレスチェックが実施され、結果のフィードバックが受けられる」（ $MSe = 1.26$ ）では、圏外群の得点が、ボランティア群、圈内群に比べて有意に高かった。一方、「(h) 自身のボランティア体験について学内で自由に語れる場所を設ける」では、ボランティア群の得点が、圈内群に比べてのみ有意に高かった（ $MSe = 1.29$ ）。

(a)～(h) 以外の項目で、必要とする支援に関しては、自由記述から、圏外群において、「ボランティアの実際についての情報提供」が挙げられた（記述例「被害の様子を伝えられる場があるとよい」, 「ボランティアに出向き、見てきた真実の写真を貼れる場所の作成」, 「実際

にボランティアに行った人の体験談を話してくれる」)。

## 考察

### (1) 大学生が大規模災害後の被災地でのボランティア活動において危惧することについて

災害直後では、ボランティア群において、「(f) 被災地の住民の方とのトラブル」についての危惧の程度が高い水準にあった。このことは、本研究の対象となったボランティア経験者の主な活動場所として、「仮設住宅や避難所等」が最も多かったことと関係していると考えられる。仮設住宅や避難所での主な活動としては、炊き出し、作業の手伝い、居住者との対話および触れ合い活動などが挙げられる。いずれの活動においても、居住者とのコミュニケーションは不可欠であるが、コミュニケーションがうまくいかず、居住者との関係が悪化する危険性も自然と高くなる。また、仮設住宅や避難所での活動は、居住者の日常生活が送られている場所にボランティアが入り込んでいく活動であるため、人によっては、侵入的に感じられたり、活動が理解してもらえなかったりする可能性も十分に考えられる。実際にボランティアを経験した学生は、仮設住宅や避難所の居住者と触れ合うなかで、コミュニケーションがうまくいかなかった場合に生じる問題や人が住む日常の場に入り込んでいく難しさを強く認識していたことがうかがわれる。また、圏内群においても、「(f) 被災地の住民の方とのトラブル」についての危惧の程度が比較的高い水準にあったことを考慮すると、本研究の対象となった被災圏内の大学生は、災害現場における直接的な体験の影響よりも、堀他(2015)が指摘するように、住民とのトラブルなどの間接的な影響を被ることを危惧しているとも考えられる。このような傾向が、他の被災圏内の大学生に共通するものかどうかは、今後より詳細に調べていく必要がある。

一方、圏外群では、「(a) 悲惨な現場体験による心身の不調(ショック、無力感、疲労感など)」についての危惧が高く評価されていた。また、「(b) 過剰な高揚感や使命感の高まりなどの情緒面への影響」や、「(d) 価値観・人生観の急激な変化」についても危惧の程度が比較的高い水準にあった。これらのことから、圏外群の学生は、災害後の被災地での直接的な体験の影響として、感情面や情緒面への影響、価値観の変化等、精神面に揺れが生じることを強く危惧していると言える。実際、圏外群の学生は、東日本大震災の被害はほぼ皆無であり、地域の特徴としてこれまで大規模災害の経験も少ない。したがって、被災地や災害現場という状況はイメージしづらく、メディアからの情報に頼るしかないため、現場は悲惨であり、精神的なショックを強く受けてしまうという一般的なイメージが賦活されやすかったと推察される。また、本研究では、時期に関わらず、他の群に比べて、圏外群の精神面の揺

れについての危惧の程度が高かったことも、上記のような漠然とした不安が反映されたものと解釈することができる。そして、このような被災地での体験からくる精神面の揺れに対する危惧の高さは、これまでに大規模災害を経験した人を除いては、災害現場から距離のある地域の学生にとっての一般的な反応に近いものであると予想される。

災害後中期では、各群とも全般的に災害直後に比べて様々な問題への危惧の程度が低かった。時間経過に伴い被災地の環境整備が少しずつでも進むことが予想されるため、それに伴い学生が危惧することも減っていくと考えられる。

他にも、自由記述からは、ボランティア経験や被災地からの距離に関わらず、各群共通して、「ボランティアに行って自分が本当に役に立てるのか」、「かえって迷惑をかけるのではないか」という危惧が挙げられた。このことは、大学生全般に共通する危惧であると考えられる。それゆえ、学生ボランティアという立場で実行可能なレベルの活動を事前に明確にし、「明確に役に立ったと思われるような貢献をしなければならない」などの使命感を強く持ちすぎないことを共有するような取り組みが重要である。

## （2）大学生が大規模災害後の被災地でのボランティア活動に参加する際に大学に求める心理的支援について

災害直後では、いずれの群においても、「(a) 被災地の情景にショックを受けた際に学内で相談（カウンセリング等）を受けられる」、「(b) ボランティア活動先でトラブルに巻きこまれた際に学内で相談を受けられる」、「(c) 被災地ボランティアに参加する際に事前教育（オリエンテーション等）が受けられる」の必要性が高く評価されていた。学生相談機関の相談員を対象とした堀他(2015)においても、同様の3項目の支援の必要性が高く評価されており、これらのことから、学生が災害直後の被災地でのボランティア活動を行う際に必要な心理的支援について、支援を受ける側も提供する側もある程度共通の認識を持っていることが示されたと言える。このような共通認識があることから、支援を提供する学生相談機関が、学内に相談対応や事前教育を行う準備があることを明確に学生に伝えることができれば、学生側も必要に応じて相談機関を利用しやすくなると考えられる。

また、圈内群と圏外群においては、「(g) ボランティアの心構えや気をつけることなどのマニュアルの配布」の必要性が高く評価されていた。ボランティア経験のない両群の学生にとっては、災害直後の被災地でのボランティア活動についてイメージしにくい部分があるため、事前教育に加え、このようなマニュアルが配布されることが安心感を高めることにつながると推察される。

一方、ボランティア群では、「(d) 被災地ボランティア参加後にフォローアップ（参加後のふりかえりの話し合い等）が受けられる」の必要性が比較的高く評価されており、圈内群に比べて有意に得点が高かった。先述の危惧に関する自由記述からは、「ボランティアに行っ

て本当に役に立てるのか」という不安を大学生全般が抱えていることがうかがわれた。このことを踏まえると、実際にボランティアを経験した学生は、活動後に話し合う機会を持ち、ボランティアに行ってきたことの意味づけがなされることを、ボランティア帰還後に強く求めていると考えられる。この項目は、ボランティア群が、他の群の学生に比べてより重視している唯一の項目であり、実際に現場を経験してきた学生だからこそ、その重要性が実感された支援内容であると言える。重村（2014）によると、活動後の話し合いは、災害支援に関わる多くの組織で業務が終わった後に自然発生的に行われるものであり、自然なディブリーフィングは、お互いを支えあうという意味でも、組織の団結力を維持するという意味でも有用である。また、堀他（2015）によると、学生を支援する学生相談機関相談員の観点からも、災害直後に被災地でのボランティアに参加した学生に対する参加後フォローアップの必要性は高く評価されており、実際にボランティア参加学生への心理的支援を実施している大学の約4割で、何らかのフォローアップが行われていた。以上のことから、災害直後のボランティア参加学生の心理的支援においては、学生に語りを強要する形にならないように注意しながらも、参加後のフォローアップの機会を積極的に導入していくことの重要性は極めて高いと考えられる。

各項目の必要性の程度に関する群間の比較においては、危惧に関する項目同様、圏外群が、他の群に比べてほぼすべての項目で得点が高かった。このことについては、先述の通り、圏外群の学生は、現場は悲惨であり、精神的なショックを強く受けてしまうという一般的なイメージが賦活されやすかったことから、様々な手段の支援の必要性を高く評価したと考えられる。

災害後中期では、災害直後に比べて各項目の平均値が全体的に低下する傾向は見られたが、災害直後に必要性が高く評価されていた項目に関しては、ほぼ同様に、各群とも災害後中期においても評価が高かった。このことから、大学生は、災害からの時間経過に関わらず、「(b) ボランティア活動先でトラブルに巻きこまれた際に学内で相談が受けられる」ことや「(c) 被災地ボランティアに参加する際に事前教育（オリエンテーション等）が受けられる」ことを必要と感じており、加えて、ボランティア経験のない学生にとっては、「(g) ボランティアの心構えや気をつけることなどのマニュアルの配布」が安心感を高めることにつながると考えられる。学生を支援する学生相談機関相談員の観点からも、災害後中期の「トラブルへの相談」や「事前教育」の必要性は高く評価されており（堀他，2015）、学生と支援者の間に一定の共通認識があることが明らかとなった。

また、ボランティア群においては、必要性の評価平均値が3.35と必ずしも高い水準にあるとは言えないが、災害後中期に「(h) 自身のボランティア体験について学内で自由に語れる場所を設ける」の得点が、圏内群に比べて有意に高かった。東日本大震災に関するボランティアに参加した学生の体験についてWeb調査を行った立石（2014）によると、ほとんどの学生が、自身の体験や被災地の状況について、周囲の人間と話していると報告している。

そして、その際、ボランティア経験のある者となない者とはボランティアに対する親和性にギャップがあり、時にはボランティアの話をしても「どうでもいい話としか思われなかった」などの消極的な反応をされてしまうという実態を明らかにしている。世間が落ち着きを取り戻す災害後中期という時期においては、このようなボランティア参加学生と周囲との温度差がより顕著に現れやすいと考えられる。それゆえ、ボランティア経験学生においては、災害後中期に、安心して自由に語れる場を学内に設置することの必要性を高く評価したと推察される。

他には、自由記述から、圏外群において、「ボランティアの実際についての情報提供」の必要性が挙げられた。繰り返しにはなるが、被災地や災害現場という状況がイメージしづらい圏外群の学生にとっては、具体的な情報を得られる機会を設けることが、ボランティア活動の心構えを形成する上で有用な支援となりうることが示唆される。

### (3) まとめ

本研究の結果から、災害後の被災地でのボランティア活動に参加することについて、被災圏内の学生は、災害直後の現場における直接的な体験の影響よりも、「住民とのトラブル」という間接的な影響を被ることを最も危惧していることが示された。一方、災害現場から遠方の圏外群の学生は、漠然と不安が高く、なかでも、悲惨な現場体験による心身の不調、過剰な高揚感や使命感の高まり、価値観や人生観の急激な変化などの、直接的な体験の影響により精神面に揺れが生じることを最も危惧していることが明らかとなった。加えて、災害現場からの距離に関わらず、大学生全般が、「ボランティアに行つて役に立てるかどうか」、「迷惑にならないかどうか」ということについて危惧していることが示唆された。

以上のことから、ある程度災害現場の様子がうかがえる被災圏内の大学においては、学生がボランティアに赴く前に、地域住民の方とのトラブルになった際のひとまずの対応や相談先を明確にしておくことが重要な支援になると言える。また、被災圏外から学生がボランティアに参加する場合には、事前教育において、ボランティア体験者の話や被災地の現状についての具体的な情報を得られる機会を設けることで、不安を低減させるような取り組みが重要であると考えられる。さらに、大学生全般にとって、学生ボランティアという立場で実行可能なレベルの活動を事前に明確にし、使命感を強く持ちすぎないことを共有するような取り組みも重要になる。このように、学生が認識している危惧という観点からは、学生の所在が被災圏内か否かによって重視すべき内容に違いは見られるが、事前教育の重要性が高いことが示された。

災害後の被災地でのボランティア活動に参加する際に、学生が大学に求める心理的支援に関しては、心理相談やトラブル相談のような個別支援、および上述のような事前教育に加えて、災害直後では、ボランティア帰還後のフォローアップの重要性が高いことが示された。

このことは、特に実際にボランティアを経験した学生において重視されており、安心してボランティア体験を語り、意味づけしていくような取り組みに、学生支援の専門機関である学生相談機関も何らかの形で関わることが望ましいと言える。また、ボランティアに初めて行くような学生や被災圏外から参加する学生に対しては、ボランティアの心構えや注意点などに関するマニュアルの配布が有効な心理的支援の手段となることが明らかとなった。

最後に、本研究の課題として、ボランティア活動開始時期についての情報が不足していたことが挙げられる。Perrin et al. (2007) によると、警察官を除いた職種では、災害の当日から現場で救援活動に参加した人ほど PTSD の傾向が高く、その傾向は活動時間が長くなるとより顕著に現れることを報告している。このことから、被災地でのボランティア参加学生においても、活動開始時期の違いによって危惧することや必要とする支援内容が異なってくることが予想される。今後は、このような要因も含めて、詳細に検討していく必要がある。

## 引用文献

- 茶屋道拓哉・筒井睦 (2012). 東日本大震災における学生ボランティア活動の教育的意義 九州看護福祉大学紀要, **12**(1), 25-37.
- 加藤寛・飛鳥井望 (2004). 災害救援者の心理的影響—阪神・淡路大震災で活動した消防隊員の大規模調査から— ト라우マティック・ストレス, **2**, 51-59.
- Guo Y., Chen C., Lu M., Tan H. K., Lee H., & Wang T. (2004). Posttraumatic stress disorder among professional and non-professional rescuers involved in an earthquake in Taiwan. *Psychiatry Research*, **127**, 35-41.
- 堀匡・佐藤静香・齋藤未紀子・池田忠義・吉武清實 (2015). 東日本大震災ボランティア参加学生への学生相談機関における心理的支援に関する実態調査 東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要, **1**, 131-140.
- 市来百合子・大久保千恵 (2013). 教育復興支援ボランティア学生の経験—ボランティア学生への心理的支援への一考察— 教育実践開発研究センター研究紀要 (奈良教育大学), **22**, 115-122.
- 金子玲子 (2011). ボランティア学生へのサポート 大学時報, 日本私立大学連盟 pp. 70-73.
- 小林功英 (2014). 第 5 章 災害ボランティア経験が持つ大学生へのインパクト 小林功英 (編) 災害ボランティア経験が持つ大学生への教育効果 高等教育研究叢書 広島大学高等教育研究開発センター pp. 37-43.
- 餅原尚子 (2011). 「惨事ストレス」から生きる意味へ 久留一郎 (編) 現代のエスプリ 3 ト라우マと心理臨床—被災者支援に求められるもの— 至文堂 pp. 87-97.
- Perrin M. A., DiGrande L., Wheeler K., Thorpe L., Farfel M., & Brackbill R. (2007). Differences in PTSD prevalence and associated risk factors among world trade center disaster rescue and recovery workers. *The American Journal of Psychiatry*, **164**, 1385-1394.
- 重村淳 (2014). 第 8 章 救援者のトラウマと心理教育 前田正治・金吉晴 (編) PTSD の伝え方—トラウマ臨床と心理教育— 誠信書房 pp. 147-166.
- 立石慎治 (2014). 第 6 章 大学や周囲の人との関係性 小林功英 (編) 災害ボランティア経験が持つ大

- 学生への教育効果 高等教育研究叢書 広島大学高等教育研究開発センター pp. 45-57.
- 和井田節子・田中卓也・小林田鶴子・小泉晋一（2013）. 被災地支援ボランティア活動が教職志望の大学生に与える教育的意味—石巻市内の小学校における支援活動を通して—, 共栄大学研究論集, **11**, 251-272.
- 山下祐介（2014）. ボランティア・市民活動をめぐる阪神・淡路大震災と東日本大震災—福島第一原発事故の支援と復興を問い直すことから— 社会学年報, **43**, 65-74.

## 付記

本研究は、JSPS 科研費 26590153（研究代表者 堀匡）の助成を受けて行われた。

(2015 年 10 月 19 日受理)